

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 DATOON Rodmyr Francisco

論 文 題 目

Change and Resiliency of Traditional Labor Institutions in Response to the Effects of Special Economic Zones: The Case of Mariveles, Bataan, the Philippines

(経済特区の影響に対する伝統的な労働制度の変化と強靱性
ーフィリピン、バターン州マリベレス町の事例)

論文審査担当者

主 査

名古屋大学 教授 伊東 早苗

委員 名古屋大学 教授 宇佐見 晃一

委員 名古屋大学 准教授 日下 渉

論文審査の結果の要旨

1. 本論文の構成と概要

本論文はフィリピンの遠隔地における経済特区の導入が、周辺農村における農作業と、それを支える伝統的かつインフォーマルな農業労働制度にどのような影響を与えるかを実証的に分析するものである。フィリピン政府は 1970 年代に、海外直接投資を呼び込む目的で経済特区の建設を推進した。1972 年にバターン州マリベレス町フリーポート地区に建設された経済特区は、多国籍企業による製造業分野への投資を呼び込むためのショーケース的な意味をもつ。経済特区の建設とともに、フィリピンの遠隔地での工業化が進み、周辺にある農村における就業構造と伝統的な農作業の実践に影響をおよぼしている。本論文はこうした影響を農村調査データに基づいて実証的に分析し、変容を迫られる農業労働制度の中で強靱に残存するものと、そうでないものが混在する理由を理論化することを目的とする。具体的には、以下 2 点を研究上の設問とする。第一は、経済特区の建設は、農村周縁部における伝統的な農業労働制度と農作業の実践にどのような影響を与えるかという設問である。第二は、伝統的な農業労働制度のうち、あるものは消滅し、あるものは強靱に生き残るのはなぜかという設問である。

本論文は全 7 章からなる。第 1 章は研究課題およびその背景や意義ならびに研究の手法を説明し、本論文全体の構成を説明する章である。データ収集は 2015 年 2 月から 8 月まで実施され、著者は調査地農村の計 72 農家世帯に対して質問票を用いた悉皆調査を実施した。また、非農家世帯に対しては、村を構成する地区 (*sitio*) を単位とする比例層化無作為抽出を行い、計 100 世帯に質問票を用いた調査を実施した。データ収集の方法は、この他、キー・インフォーマント・インタビューおよび参与観察を用いている。第 2 章は、途上国農村における伝統的農業労働制度、工業化と市場経済の浸透、グローバリゼーションの進展と伝統的農業諸制度の変化、さらに制度の強靱性に関わる先行研究をレビューする。先行研究では、途上国農村における市場経済の浸透は伝統的な農業諸制度の消滅を意味すると議論されるか、もしくは、伝統的な農業諸制度の存続を図るために、悪しき市場経済の影響は遮断すべきであると議論されるかの両極端の議論が多い。一方で、速水佑次郎・菊池眞夫は 1970 年代のフィリピン農村を幅広く研究し、市場経済の浸透を受けた農業労働制度は、労働賃金との均衡が保たれるよう新しい形の制度に変容すると議論した。本研究は、速水・菊池の議論に依拠しつつ、この変容の仕方と理由をより深く検討するものである。第 3 章は、本研究の事例となるマリベレス町と、同町内の 2 つの事例農村の概要を示し、経済特区が建設される以前の農業や住民間の社会関係について説明する。さらに、稲の移植作業と収穫作業に関わる現地の伝統的な農業労働雇用制度 (*Cabecilla* および *Hunusan*) について詳述する。第 4 章は、当該調査地域に建設された経済特区の特徴とその展開を歴史的に俯瞰し、同時期に、当該地域における就業構造にどのような変化が生じたかをデータを基に分析する章である。第 5 章では、調査データをもとに、経済特区の建設が、2 つの農村における伝統的な農業労働雇用制度、とりわけ稲の移植と収穫に関わる作業に関わる雇用制度に、どのような影響をおよぼしたか、そしてこの影響が、農業労働雇用の仕組みや農業労働賃金を変化させ、伝統的な農業労働雇用制度を通じて労働を提供する側であった農民の生計にどのような影響を与えているかを論じる。続く第 6 章では、本論文の中心的課題である「特定の農業労働雇用制度のうち、消滅するものと残るものがあるのは何故なのか」について論じる。さらに、どのような要因が農業労働雇用制度の消滅を決定づけ、どのような要因がその存続に貢献したのかを議論する。具体的には、雇用

論文審査の結果の要旨

賃金の上昇と農業労働者の不足により、移植栽培は直播栽培に移行し、移植作業に関わる農業労働雇用制度 *Cabecilla* は失われたことを議論する。一方、収穫作業に関わる農業労働雇用制度 *Hunusan* は、雇用賃金の差を埋め合わせるための農作業の増大や仕組みの見直し、現物支給される粃を販売することができる近場の米市場の存在、さらにコミュニティの社会的規範を維持することによる長期的な社会的・経済的恩恵の見直しにより、経済環境の変化を受けても存続しうると議論する。

最終章である第7章は、各章の分析をつなぎ、先行研究の議論に対する本論文の学術的貢献を説明する章である。本研究の第4章から第6章までの内容は、1本の査読付き学術論文として刊行されている。

2. 評価

本論文は以下のように学術的に評価できる点を含んでいる。

(1) グローバリゼーションが途上国農村にもたらす影響について、一般論として、先行研究の存在は限定的である。途上国農村からの海外出稼労働者を扱う研究や、途上国農村で生産される農産物のグローバル・バリュー・チェーンへの取り込みを扱う研究が多い。本研究は、フィリピンの経済特区をグローバリゼーションによる市場経済化進展の一現象と捉え、この経済特区が途上国農村における伝統的な農業労働雇用制度をどのように変容させるかを実証的に検証することを通じ、グローバリゼーションと途上国農村の伝統的制度の変容という新しい領域の研究に、独自性のある事例研究を提供した点が評価される。

(2) 本研究は、東南アジア農村研究をめぐるモラル・エコノミー論と、農民行動の分析にあてはめられる合理的選択理論の間に位置づけることが可能な速水・菊池の研究上の貢献を踏まえ、制度変容に関する1970年代の速水・菊池の分析を、今日的な文脈の中で再検討し、「強韌性(Resiliency)」の概念を用いて新しい理論的な解釈を示す点が高く評価される。

一方で、本論文は、以下の点が今後の課題である。

(1) ある農業労働雇用制度は2つの調査農村において消滅し、別の農業労働雇用制度は1つの調査村においてのみ強韌性を発揮したことの原因を、村落に内包される要因（たとえばコミュニティの規範）と村落外の要因（たとえば近場における米市場の存在）の複合的なものであると議論するが、どちらがより決定的な要因であるかの特定化には至っていない。

(2) 本研究は、農民行動を分析する視点として、モラル・エコノミー論と合理的選択理論の間をつなぐ視点に立つものだが、二つの理論をつなぐ説明として速水・菊池を引用する一方で、その視点を理論的に説明する試みが必ずしも十分ではない。同時に、速水・菊池が制度の変容を新しい制度の浮上と分析した一方で、本研究の著者は、この変容を同じ制度の修正版と分析するが、二つの解釈の違いと意義についての説明が尽くされていない。

以上の点は、本研究の博士論文としての価値を損なうものではなく、今後の研究課題として克服が期待されるものである。

論文審査の結果の要旨

3. 結論

以上の評価に基づき、審査員一同は一致して、本論文を博士（国際開発学）の学位を授与するに値するものと判定した。